日本語学習者の音声上の課題に関する考察

―一般日本語母語話者の発話評価から―

関　根　千　紘

［キーワード：①日本語学習者　②一般母語話者による評価　③音声課題　④アクセント　⑤イントネーション］

1. はじめに

日本語学習者（以下、学習者）の発話においては、音声上の課題が散見されることがあるが、その内容は多岐にわたり、またその影響も意味にほとんど干渉しないものから内容の理解を阻むようなものまで様々である。意味に干渉せずとも、話者に対する印象に影響するものもあるように思われる。これらの課題は日本語学習、特に教室の中での学習・教育場面において、意識的に取り扱われるべきなのであろうか。

本稿では、「一般日本語母語話者[1]とのコミュニケーションにおいて学習者の音声課題が問題となりうるか」という観点から、音声課題、特にアクセントやイントネーションの逸脱といった音の高低に関わる課題に焦点をあて、その学習・教育場面で扱う必要性を検討する。また、一般日本語母語話者の中でも、その属性等によって音声課題への評価にどのような傾向があるかを探ることで、学習者が特に音声課題に気を付けるべき場面が生じる可能性を考察する。

2. 先行研究

先行研究について、①音の高低の逸脱への日本語母語話者の評価、②学習者の発話に対する一般日本語母語話者の評価、③音声課題への評価の傾向、の３点についてそれぞれ概観する。

2-1. 音の高低の逸脱への日本語母語話者の評価

郡（2019）では、音の高低の逸脱に対して日本語母語話者が抱く違和感の大小を、研究者自身が発音・録音した音声を用いて調査している。その結果、アクセント、補助動詞および文末のイントネーションについては、典型から外れると強い違和感を与えることが示され、日本語教育においては特にアクセントの方が、指導が優先されるべきとし

ている。

しかし、実際に学習者の自然発話でも音の高低の逸脱が着目されるかは、この調査では明らかでない。学習者の発話では、音の高低以外の逸脱が生じることが考えられ、それらに聞き手の注意が向く可能性もあるためである。

2-2. 学習者の発話に対する一般日本語母語話者の評価

一般日本語母語話者が学習者の発話を評価する際の観点については、原田ほか（1998）、吉田（2014）、渡部（2005）等で研究されているが、特に音声課題が着目されるかについて言及しているものに、河野ほか（1999）、小池（1998）、中川ほか（1998）、渡部（2003）等がある。このうち、中川ほか（1998）や渡部（2003）は、音声課題は着目される項目のひとつであるとの結果を示しているが、具体的に着目される項目が不明である、調査対象の評価者が少ない等の課題がそれぞれ残る。一方、一般日本語母語話者は「アクセントやイントネーションの違い、不自然さは気にしていない」（小池，1998）、「外国語なまりには寛大である」（河野ほか，1999）といった研究結果もある。しかし評価者が少ないほか、評価対象となった発話にどのような音声的逸脱があったか、特に音の高低については記載されていないため、音声課題が少なかった可能性もあり、追究の余地がある。

また、発話のうち音声への評価のみに焦点をあてた研究として、小河原（1993）、河野ほか（1998）等があるが、どちらも調査者が指定した文を学習者に読ませたものを評価対象としている。2-1 で述べたように、実際の学習者の発話では、音声以外の項目にも逸脱が生じる可能性があり、これらの研究の結果を学習者の自然発話における音声への評価としてそのまま捉えることはできないだろう。

2-3. 音声課題への評価の傾向

学習者の発話に対する評価を、評価者（教師、一般日本語母語話者、学習者等）によって比較、検討し、その差を報告している研究は複数存在するが（小池，1998；中川ほか，1998；渡部，2003 等）、一般日本語母語話者の中でその属性等によって違いがないか検討した調査は少ないようである。渡部（2003）では学習者との接触場面の有無による評価の違いを検討し、その結果評価の違いはなかったとして報告しているが、この調査における一般日本語母語話者は少なく（6 名）、学習者との接触場面があるのは 1 名のみである。したがって、さらに多くの一般日本語母語話者の評価を調べ、その傾向を検討する必要が考えられる。

3. 研究課題

本研究では、一般日本語母語話者が日本語学習者の発話を聞いて音声上の課題を問題

点と考えるかを探るため、特にアクセント、イントネーションといった音の高低に逸脱がある学習者の発話に絞って調査する。そのために以下の3つの研究課題を掲げる。

RQ1. 音声課題がある日本語学習者の発話を聞いたとき、一般日本語母語話者はその課題に着目するか。

RQ2. 一般日本語母語話者は、評価の際に音の高低の逸脱に着目するか。

RQ3. 音声課題への着目において評価者の属性による差や傾向はあるか。

4. 調査

4-1. 調査概要

本調査は、一般日本語母語話者が学習者の発話を聞いて着目する点を、その評価の高低に関わらず抽出し、その中で音声に関わるもの、特に音の高低に関わる項目についてのものがどれだけあるかを観測し、またその結果に一般日本語母語話者の属性や学習者との接触機会による差があるかを調べるための調査である。調査にはアンケート調査とインタビュー調査があり、すべて調査者（筆者）と対面した状態で行った。

調査期間は2019年11月10日から同月22日までで、調査場所は発話の録音の再生、聞き取りやインタビュー調査の録音に障害のない、静かで調査中の人の出入りがない室内で行った。

4-2. 調査内容

本調査にはアンケート調査2種とインタビュー調査1種がある。本節でその内容について述べる。

4-2-1. アンケート調査①　―学習者の発話に対する評価調査―

調査協力者に学習者と日本語母語話者との会話の録音を聞かせて、学習者の発話の中で受けた印象や気づいた点を自由に記述してもらった。メモが終わったら尺度評価をしてもらった。まず全体評価として話の聞きやすさについて、次に項目ごとの評価として「話の内容」「文法」「使う語彙や表現」「音声」の4項目について、それぞれ4段階で評価してもらった。

今回の調査で用いた学習者と日本語母語話者との会話は、国立国語研究所のプロジェクトによる成果『多言語母語の日本語学習者横断コーパス（International Corpus of Japanese as a Second Language：I-JAS）』（以下、I-JAS）に収集されている学習者の日本語母語話者との会話2ペア分である。該当学習者の背景情報は以下のとおりである。

【表1　学習者の背景情報】

ID	性別	身分	出身国	現在住んでいる国	母語(一番強い言語)	J-CAT 合計 /400
KKD01	女性	学生	大韓民国	大韓民国	韓国語	320
KKD08	女性	学生	大韓民国	大韓民国	韓国語	303

(「I-JAS　FS 一覧　教室環境学習者（海外・国内）20190510 版 .xlsx」より抜粋)

発話者の日本語レベルによって一般日本語母語話者からの評価が変わると考えられるため（小河原，1993、小池，1998)、今回は上級に分類される学習者に限定してその発話を評価対象とした。その中でも今回特に焦点をあてる音声課題、中でも音の高低に関わる課題（特に KKD01 はイントネーション、KKD08 はアクセントについて）が見られたため、この 2 名の発話を用いた。

会話は I-JAS で公開されている学習者 2 名のそれぞれの会話資料のうち、「対話」課題の中から「(6) 過去から将来へ　⑬議論『都会に住むか、田舎に住むか』(会話例 これから 10～20 年後、住むとしたら都会がいいですか、田舎がいいですか)【意見陳述＆反論】」の部分を抜粋したもので、KKD01 と日本語母語話者の会話は 3 分 13 秒、KKD08 と日本語母語話者の会話は 2 分 32 秒であった。会話の中で逸脱と考えられた項目の一部は、稿末に「参考資料 1」として挙げている。

4-2-2. アンケート調査②　―調査協力者の属性等に関する調査―

調査協力者の属性（性別、年代、職業）と、日本語を話す非日本語母語話者との接触機会の有無や接触相手との関係、日本語教育の専攻経験および従事経験[2)] について尋ねた。

4-2-3. インタビュー調査　―アンケート調査①の付随調査―

アンケート調査①で調査協力者に書いてもらったメモは、発話を聞きながらの端的なものであるため、調査者からはメモの意図や具体的な内容がわからないものも多いと予想された。また、尺度評価に関しても、その評価基準は評価者ごとに不明である。したがって、インタビュー調査でメモの具体的な内容や尺度評価の理由を尋ねることとした。このとき、後に調査協力者から得られたコメントについて整理するため録音を伴った。調査者はインタビューシナリオと質問事項を事前に用意してインタビュー調査に臨み、調査協力者の発話に応じてより具体的に聞き出せるようにその場で適宜質問を追加した。

4-3. 調査方法

調査は調査協力者とアポイントメントをとったうえで 1 人ずつ行った。調査の流れは以下の通りである。

(1) 調査全体の流れについて説明した。続いてアンケート調査①の内容と回答方法についての説明を紙面で読んでもらった。ここで、発話している学習者がJ-CATで上級に分類されること、メモは文章になっていなくてもよいこと、およびプラス評価でもマイナス評価でも構わないことを伝えている。

(2) スピーカーの音量チェックのため、I-JASより別途選択、抜粋した会話（KKD07[3)]、28秒）を流し、聞きにくい場合は知らせてもらい音量を調整した。

(3) アンケート調査①の調査用紙を調査協力者に渡し、アンケート調査①を行った。2ペア分の会話を聞かせるにあたり、調査協力者が2人目を1人目と比べて評価したり、1人目の評価を終えた時点で尺度評価で尋ねられる観点を学習して2人目を聞く際の着眼点に影響が出たりする可能性を考慮し、調査協力者IDが奇数の調査協力者はKKD01、KKD08の順で聞いてもらい、調査協力者IDが偶数の調査協力者はKKD08、KKD01の順で聞いてもらった。また、調査用紙は、KKD01、KKD08について別々に用意し、メモ・尺度評価ともに書き終えた時点でその都度回収した。

(4) インタビュー調査を行った。アンケート調査①で聞いたのと同じ順で対KKD01、対KKD08のメモおよび尺度評価について調査協力者に尋ねた。インタビュー調査の開始に際して録音を開始し、インタビュー調査の終了とともに録音を終えた。

(5) アンケート調査②の調査用紙を渡し、書き終えた時点で回収した。

5. 調査結果と分析

5-1. 回答数と調査協力者の概観

本調査では「日本語を母語とし、日本語教育の専攻経験および従事経験がない者」を対象とし、12名の調査協力者から有効回答を得た。以下表においても、回答者は全て12名である。

調査協力者はうち3名が男性、9名が女性で、年代は全員20代であった。また職業を自由記述回答で尋ね、その回答を「学生」と「学生以外」で分類すると、学生が10名、学生以外が2名であった。有効回答者の日本語教育の専攻および従事経験は、アンケート調査でも全員ないことが改めて確認されている。また、調査協力者には、日本語を話す非日本語母語話者との接触機会の有無を尋ねた。その結果、日本語を話す非日本語母語話者との接触機会があると答えた調査協力者は7名で、ないと答えた調査協力者は5名であった。

5-2. 音声上の課題への着目

一般日本語母語話者が学習者の発話を聞いて音声項目に着目するかを考える。なお、調査協力者から得られたコメントの一部を「参考資料2」として稿末に挙げている。ま

ず得られたコメントを、表2に示す4つに分類した。それぞれのコメントの件数とコメント全体に占める割合について、集まった12名分の回答をまとめると、表3および表4のようなった。

【表2　コメントの観点】

観　点	該当するコメント
内　容	話題や会話の展開についてのコメント
文　法	使用文法の正誤についてのコメント
語彙・表現	使用されている語彙や表現の妥当性についてのコメント
音　声	発音、抑揚、声量等の音声面についてのコメント

まずKKD01の発話に対するコメントでは、計79件のコメントが得られた。最も言及されているのは語彙・表現の項目であり、得られたコメント全体のうち39.24%を占める。音声に対するコメントは、それに次いで2番目に多いということになる。内容や文法の項目に比べると、音声は2倍以上のコメント数を得ており、音声への一般日本語母語話者の着目は少なくないと考えられる。次にKKD08の発話に対するコメントを考える。KKD08の発話に対しては計60件のコメントを得ることができたが、うち46.67%にあたる28件が音声に関するコメントで、ほかの3つの項目より高い割合を占めている。以上から、KKD08の発話における音声は、KKD01以上に一般日本語母語話者から着目されたと言える。

ただし、KKD01、KKD08どちらの発話に対してのコメントでも、挙がるコメントの数は評価者個人によって異なることがわかる。特に音声は、内容や文法と比べてコメント数の個人差が大きい。KKD01の音声についてのコメント数は最も少ない人で0件（調査協力者ID03、ID04）、最も多い人で4件（同ID02）、KKD08に対しても最も少ない人で0件（同ID03、ID09）、最も多い人で5件（同ID12）である。したがって、一概に「一般日本語母語話者は学習者の発話の中で音声に着目する」とは言えない結果となった。

また、KKD01、KKD08それぞれの発話に対する尺度評価は表5および表6のようになった。なお、尺度評価は数字が大きいほど「聞きやすかった」「気にならなかった」ことを示し、数字が低いほど「聞きやすくなかった」「気になった」である。

これを見ても、KKD01、KKD08どちらの発話に対しても音声の評価と聞きやすさの評価の間に強い正の相関は見られなかった。このことから、音声に関して低評価をしても、発話全体の評価には大きく影響しないと考えられる。実際に、次のようなコメントが得られている。

・（総合評価のつけ方として）「聞き取れない部分もある、はするものの、まあそんな

【表 3　KKD01 に対するコメント】

調査協力者ID	（参考）メモの数	コメントの総数	内容に関するコメントの数	文法に関するコメントの数	語彙・表現に関するコメントの数	音声に関するコメントの数
ID02	4	10	2	1	3	4
ID03	3	3	0	0	3	0
ID04	3	5	1	2	2	0
ID06	2	2	0	0	1	1
ID07	6	7	0	1	3	3
ID08	1	3	0	0	1	2
ID09	3	5	0	3	1	1
ID10	7	9	3	1	2	3
ID11	9	9	1	2	3	3
ID12	4	11	2	1	5	3
ID13	2	10	0	1	6	3
ID14	3	5	1	0	1	3
総　計	47	79 （100.00％）	10 （12.66％）	12 （15.19％）	31 （39.24％）	26 （32.91％）

【表 4　KKD08 に対するコメント】

調査協力者ID	（参考）メモの数	コメントの総数	内容に関するコメントの数	文法に関するコメントの数	語彙・表現に関するコメントの数	音声に関するコメントの数
ID02	1	2	0	1	0	1
ID03	1	1	0	0	1	0
ID04	3	7	0	2	4	1
ID06	3	3	0	0	1	2
ID07	2	3	0	0	0	3
ID08	1	4	0	2	1	1
ID09	3	4	0	1	3	0
ID10	5	8	1	1	2	4
ID11	6	10	1	0	5	4
ID12	4	7	1	1	0	5
ID13	3	6	0	1	2	3
ID14	2	5	0	1	0	4
総　計	34	60 （100.00％）	3 （5.00％）	10 （16.67％）	19 （31.67％）	28 （46.67％）

【表 5　KKD01 に対する評価（尺度）】

	調査用紙における評価内容				
	A：話の聞きやすさ	B：話の内容	C：文法	D：使う語彙や表現	E：音声
平　均	3.25	2.75	3.17	2.67	2.50
標準偏差	0.72	0.83	0.90	0.85	0.65
Aとの相関係数	—	0.52	0.45	0.41	−0.09

【表 6　KKD08 に対する評価（尺度）】

	調査用紙における評価内容				
	A：話の聞きやすさ	B：話の内容	C：文法	D：使う語彙や表現	E：音声
平　均	3.25	3.42	3.08	3.17	2.50
標準偏差	0.60	0.49	0.95	0.80	0.96
Aとの相関係数	—	0.21	0.84	0.79	0.22

に、それ以外の点においては困ったことはなかったので『聞きやすかった』ということにしました。」（調査協力者 ID14 のコメントより）

・「言ってることを多分そのまま聞けば、伝わりはするっていうところだったので。特に問題はないんじゃないかな」（調査協力者 ID13 のコメントより）

以上のようなコメントから、音声項目で評価が低くなる要因があっても、発話内のほかの部分で逸脱がない、発話全体を通して内容の理解に問題が生じない範囲では、全体評価への影響は少ないということがわかる。

5-3. 音の高低に関わる課題への着目

次に、音声の中でも音の高低に関する項目が注目されるかという観点から、調査結果を概観する。調査協力者から得られたコメントのうち、前節で「音声」に分類したコメントを、さらに表 7 に示す分類基準に基づいて 5 つに分類した。それぞれのコメントの件数とコメント全体に占める割合について、集まった 12 名分の回答を概観すると、表 8 および表 9 のようになった。

KKD01 の音声に対しては、項目ごとに見るとアクセントとポーズについて指摘するコメントが最も多く各 6 件で、KKD08 の音声に対しては、アクセントについてのコメントが 16 件で最も多かった。本研究では音の高低に関する一般日本語母語話者の着目を観察するので、音の高低に関するコメント、すなわちアクセントとイントネーションに対するコメントを合わせて考える（表 8、9 網掛け部分）。すると、KKD01 の音声に

【表７　音声に関するコメントの観点】

観　点	該当するコメント
アクセント	単語の中での音の高低についてのコメント
イントネーション	句以上の単位での音の高低についてのコメント
発　音	子音、母音の発音についてのコメント
ポーズ	発話中のポーズのとり方についてのコメント
その他	話す速さ、プロミネンスの置き方、単語のリズム、声量についてのコメント

【表８　KKD01 の音声に関するコメント（観点別内訳）】

	音声全体	アクセント	イントネーション	発　音	ポーズ	その他
総　計	26 （100.00％）	6 （23.08％）	4 （15.38％）	4 （15.38％）	6 （23.08％）	6(注1) （23.08％）
最小値(注2)	0	0	0	0	0	0
最大値	4	1	1	1	2	1

※注１：「その他」のコメント数内訳は、話す速さについて２件、プロミネンスについて１件、リズムについて２件、声量について１件である。
※注２：「最小値」「最大値」はそれぞれ調査協力者１名当たりのコメント数の最小値と最大値を示している。

【表９　KKD08 の音声に対するコメント（観点別内訳）】

	音声全体	アクセント	イントネーション	発　音	ポーズ	その他
総　計	28 （100.00％）	16 （57.14％）	6 （21.43％）	3 （10.71％）	1 （3.57％）	2(注3) （7.14％）
最小値	0	0	0	0	0	0
最大値	5	3	2	1	1	1

※注３：「その他」のコメント数内訳は、声量について２件である。

対しては該当するコメントが 10 件（音声に対するコメント数の総計に対して 38.46％）、KKD08 の音声に対しては 22 件（同様に 78.57％）であり、いずれもほかの音声項目のコメント数および割合に比べて最も高い数値である。音声項目の中でも、音の高低に関する項目が着目されやすいことが示唆されている。

KKD08 はアクセントに特に逸脱が見られる学習者で、16 件のアクセントへのコメントが音声に関するコメントの 60％近くを占めている。その割合からも KKD08 の発話におけるアクセントが一般日本語母語話者の注目を集める重要な要素となっていることが

言える。さらにこのKKD08のアクセントについて言及した16件のコメントは全て、好意的な評価ではなく逸脱を指摘するものであった。したがって、KKD08のアクセントの逸脱は、一般日本語母語話者に違和感を与え、着目され問題視されたと言える。一方で、イントネーションに逸脱が顕著であると考えていたKKD01に対しては、イントネーションに対するコメントはあったものの、音声に関するコメントに占める割合は15.38％にとどまり、一般日本語母語話者からの着目は特に顕著ではないと言える。かえってアクセントについてのコメントの方が多いことから、一般日本語母語話者はイントネーションよりアクセントに着目して発話を聞いている可能性が示された。これは郡（2019）のイントネーションの逸脱よりアクセントの逸脱の方が日本語母語話者に違和感を与えやすいという調査結果と一致する。

ただし各項目へのコメント数は調査協力者の間でも差があることが、表8および表9の「最小値」「最大値」欄から読み取れる。また、調査協力者1名が言及した観点の数についても、対KKD01では最小値0、最大値3、対KKD08では最小値0、最大値4と、個人差があった。

5-4. 音声課題への着目・評価と調査協力者の属性等

最後に、音声に関するコメントおよび評価について、一般日本語母語話者の属性等による傾向がないかを探るため、本研究では①性別、②学習者との接触機会の有無、③（接触機会がある場合）接触する学習者との関係の3つの観点から、音声に関するコメントの数および音声に対する評価を整理した。

まず表10より評価者の性別と音声への着目の関係を考える。KKD01に対しては男性の方がコメント数が多く、KKD08に対しては反対に女性の方がコメント数が多いこと、また尺度評価についても、KKD01に対しては男性による尺度評価が低く、KKD08に対しては女性による尺度評価が低いということがわかる。したがって本調査では、一般日本語母語話者の性別によって、音声に対するコメント数および評価に一定の傾向は見られなかったと言える。

【表10　音声に対するコメント数および評価：男女別】

回答者の性別	回答者数	対KKD01				対KKD08			
		コメント数		尺度評価		コメント数		尺度評価	
		平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差
男性	3	2.33	0.94	2.33	0.47	2.00	1.41	2.67	0.94
女性	9	2.11	1.37	2.56	0.68	2.44	1.71	2.44	0.96

次に表11より学習者との接触機会の有無が音声課題への着目に及ぼす影響を検討す

る。音声に関する平均コメント数を見ると、KKD01、KKD08 どちらの発話に対しても、学習者との接触機会がある一般日本語母語話者の方が、音声に関するコメントを多く述べていたことが明らかである。また、音声に対する尺度評価の平均を見ると、学習者との接触機会がある調査協力者の方が評価が低いことがわかる。以上 2 点を併せると、学習者との接触機会がある一般日本語母語話者の方が、接触機会がない一般日本語母語話者に比べ、学習者の音声に着目しやすく、またその逸脱により評価が下がりやすいという可能性が示唆されたことになる。これは学習者との接触場面の有無で評価は変わらないとした渡部（2003）とは異なる結果である。

【表 11　音声に対するコメント数および評価：接触機会による比較】

学習者との接触機会	回答者数	対 KKD01				対 KKD08			
		コメント数		尺度評価		コメント数		尺度評価	
		平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差
ある	7	2.86	0.83	2.14	0.35	3.00	1.07	2.00	0.53
ない	5	1.20	1.17	3.00	0.63	1.40	1.85	3.20	0.98

学習者との接触機会がある方が音声課題に着目することを踏まえ、接触する学習者との関係と音声への着目についても検討を試みた。しかし、学習者との接触機会がある 7 名の調査協力者に、日本語学習者との関係を「1 家族、2 友人、3 同僚、4 仕事相手（顧客等）、5 近隣住民、6 その他」から選んでもらったところ（複数回答可）、「2 友人」が 5 名に選択された以外は、各選択肢の回答者数は 0～2 名にとどまった。学習者との関係ごとに発話に対するコメント数や尺度評価を比較しても、評価者数が少なく、個人差も大きく影響すると考えられるため、本調査では学習者との関係による評価差について断定的な結論は避けることとする。

6. 考察

本調査で得られたコメントの内容を分析して観点ごとに整理した結果、音声上の課題を抱える学習者の発話を聞いたとき、音声項目に着目する一般日本語母語話者が多いことがわかった。学習者の発話の中で音声が一般日本語母語話者に着目されるという結果は、2 章で提示した中川ほか（1998）や渡部（2003）とは一致したが、小池（1998）や河野ほか（1999）とは異なる結果となった。結果が異なった原因としては次のような可能性が考えられる。

①明確な音声上の課題がある学習者を選んで調査資料としたため、一般日本語母語話者に音声項目が着目されやすかった

②発話者が上級学習者であることをあらかじめ調査協力者に伝えていたため、評価が

厳しくなり、逸脱への指摘も増加した

③発話者が上級学習者であったため、内容や文法の課題が初級学習者より少なかったことが考えられ、その分音声への着目が増加した

④小池（1998）や河野ほか（1999）では、学習者の発話している姿を見て評価しており、表情や視線もコメントを受けていたが、本調査では視覚的な評価対象がなく、その分聴覚的に得られる情報に一層の注意が向き、結果として音声項目への着目が増加した

ただし④については、学習者の発話を視聴して評価する調査方法をとっている中川ほか（1998）や渡部（2003）でも音声項目への着目が報告されているため、それらも併せて考えると視覚的な情報の有無が音声への着目に影響する可能性は低いと考えられる。

また、音声課題の中でも特にアクセントやイントネーションといった音の高低に関する項目は、ほかの音声項目に比べて一般日本語母語話者からコメントを受けやすかった。特に、音の高低に関する項目の中でもアクセントが一般日本語母語話者に着目されることが考えられ、これはアクセントの逸脱が特に母語話者に違和感を与えるとした郡（2019）の結果に沿うものである。本調査によって、音の高低のみに逸脱がある作為的な発話だけでなく学習者の自然発話においてもイントネーションよりアクセントが評価者に問題視されることが示されたと言える。

音声への着目と一般日本語母語話者の属性等については、一般日本語母語話者の学習者との接触機会がある方が、ない場合よりコメントが多く評価も厳しい傾向が示された。「接触により学習者の発話を聞くことに慣れている一般日本語母語話者の方が、評価がやさしいのではないか」という可能性も考えられたが、むしろ学習者と接触している方が音声への着目が顕著で厳格であったことになる。その原因としては、普段接触している学習者と比較して今回の評価対象の音声への評価が低くなった可能性がまず考えられる。普段接触する学習者の発話レベルはより母語話者に近いので違和感が少ない、または普段接するのは非韓国語母語話者の学習者であるので韓国語母語話者の音声は聞き慣れていないといった場合、今回の評価対象には違和感が強いことが予想される。他に、学習者と数多く接触する中で、一般日本語母語話者の中の評価観点が次第に形成され、学習者と接触しない母語話者よりも評価が厳しくなった可能性も考えられる。また、渡部（2003）では、一般日本語母語話者は全員評価基準として音声を言及しているが、その中で学習者との接触場面の有無による評価の差はなかったと報告されており、本調査の結果はこれと異なるが、その原因として以下のような原因が考えられる。

①調査対象者の人数が両調査で異なり、人数が少ない渡部（2003）では評価者の属性による差を見出しにくかった

②渡部（2003）における、学習者と接触場面がある一般日本語母語話者は、学習者と「仕事でまれに会う」という母語話者のみで、友達として学習者と接触するケース

が多かった本調査の調査協力者に比べると、接触機会がない母語話者に近い評価基準を持っていた

本調査で示された学習者との接触機会の有無による傾向は、学習者が特に音声課題に気を付けるべき場面等を直接示すには至らないが、一般日本語母語話者の中でも学習者の音声への着目の程度に傾向があることを提示する１例となり、ほかの観点での傾向を探ることで音声課題に注意すべき相手や場面が見つかる可能性を示したと考える。

7. 提言

前章までの調査結果、分析および考察を踏まえ、以下に提言をまとめる。

１つ目は、一般日本語母語話者との会話を想定した日本語学習において、音声課題は意識的に取り扱われるべきであり、特に教室環境では教師がそれを促すべきであるということである。内容が伝わる範囲では、音声課題は会話に直接の支障をきたさないかもしれないが、一般日本語母語話者との会話や人間関係をより円滑にするためには、音声課題の克服が有用であると考えられる。そうした中で、教師は学習者の発話を客観的に聞き、逸脱がある音声課題やその改善方法について専門的な知見から助言ができる人材であるため、学習者の音声学習を促す役割を積極的に果たすべきであろう。

２つ目に、その音声学習の中でも、音の高低に関する項目、特にアクセントは、その逸脱の修正や防止が図られるとよいということが挙げられる。音声項目を意識的に学習に取り上げると言っても、教室内外に関わらず時間や用意できる教材・教具に制限がある学習環境においては、多岐にわたる音声項目をすべて十分に扱うことは不可能だろう。また、特に複数名の学習者がいる教室環境においては、個々の学習者が抱える音声の逸脱それぞれに細かに対応することが難しい場合も考えられる。したがって、特定の音声項目を選定して優先的に学習に取り入れることが有用となる場合もあり、その際に一般日本語母語話者の着目点は有効な選定基準となりうる。学習者の発話に音の高低に関する逸脱がある場合、それを聞いた一般日本語母語話者に指摘されやすいことは調査結果で示した通りであり、これを踏まえて特に学習が推奨される音声項目は、音の高低に関する項目ということになる。

8. まとめと今後の課題

学習者の抱える逸脱の中で特に音の高低に関する項目を学習や教育活動の中に積極的に取り入れる検討が必要であろうことは、先述のとおりである。特に日本語教育に従事する者は、学習者の発話に対して専門的な視点をもつことができる一方で、一般日本語母語話者の視点は意識して目を向けなければ取り入れることが難しいかもしれない。学習者が教室外で接触する一般日本語母語話者の視点も取り入れて、扱う学習項目を検討することが望ましいと考える。

今回の研究で、学習者との接触機会がある一般日本語母語話者の方が、学習者の発話の中でも音声への着目が顕著であるという傾向は示すことができたが、接触機会がある中でその関係による音声への着目や評価の差については、回答者数の不足により明確に提示できなかった。学習者との関係は、学習者との接触場面を大いに反映すると考えられるが、それによって学習者の発話への一般日本語母語話者の着目点や評価が変わるとすると、学習者がどのような相手と、どのような場面で話すために日本語を学習するかというニーズによって、音声学習が推奨されるかが異なる可能性がある。今後、よりデータの数を増やして検討を進める余地があると考える。

また、本調査では韓国語母語話者の発話のみを評価対象としたが、他の母語をもつ学習者では結果が異なる可能性がある。例えば中国語母語話者と比較すると韓国語母語話者は、助詞の誤用率が低い（謝ほか，2005）、依頼の疑問文で上昇イントネーションを使用する傾向にある（小池，2002）等の研究がある。また述語の視点表現の使用や談話内の視点の置き方についても、母語の影響があると考えられている（ダンタイ，2020）。これらを踏まえると、母語が異なる学習者の発話を聞いたとき、一般語日本語母語話者が着目する点も変わり、音声が着目されるかについても異なる可能性がある。韓国語以外を母語とする学習者の発話に関しても、一般日本語母語話者がどのような点に着目するか、検討を進めるべきである。

注

1　本稿では、日本語を母語とする、日本語教育に携わっていない者を「一般日本語母語話者」とする。

2　本調査は一般日本語母語話者を調査対象としているので、日本語教育の専攻経験および従事経験のない人が対象であり、調査協力者を募る段階でその点は提示している。アンケート内のこの設問はそれを確かめるためのものである。

3　この学習者 KKD07 は、調査で使用した KKD01 や KKD08 と同様、韓国語母語話者で J-CAT で上級に分類されている学習者であったために選択した。

参考文献

小河原義朗（1993）「外国人の日本語の発音に対する日本人の評価」『東北大学文学部日本語学科論集』第 3 号，1-12

河野俊之、松崎寛（1998）「一般日本人と日本語教師の音声評価の差異」『日本語教育方法研究会誌』Vol.5 No.2, 24-25

河野俊之、小林ミナ、小池真理、原田明子（1999）「学習者の日本語音声はどのように評価されるか」『日本語教育方法研究会誌』Vol.6 No.1, 18-19

小池圭美（2002）「依頼文における終助詞『か』のイントネーション」『言語文化と日

本語教育』24, 13-27
小池真理（1998）「学習者の会話能力に対する評価に見られる日本語教師と一般日本人のずれ―初級学習者の到達度試験のロールプレイに対する評価―」『北海道大学留学生センター紀要』第 2 号，138-156
郡史郎（2019）「アクセントとイントネーションの逸脱に対して感じる違和感について」『言語文化共同研究プロジェクト』2018 巻，17-28
謝福台、金城尚美（2005）「日本語学習者の『は』と『が』の使い分けに関する一考察―中国語母語話者と韓国語母語話者の場合―」『留学生教育』第 2 号，41-59
ダンタイ クインチー（2020）「中級日本語学習者の視点は母語によって異なるか―I-JAS のストーリーテリングのデータの分析から―」『国立国語研究所論集』18, 93-119
中川道子・石島満沙子（1998）「会話の上達度を計る評価基準」『北海道大学留学生センター紀要』第 2 号，169-185
原田明子、小池真理、小林ミナ（1998）「一般の日本人は学習者の日本語をどのように評価するか」『日本語教育方法研究会誌』Vol.5 No.1, 8-9
吉田さち（2014）「日本語学習者の言語運用に対する日本語母語話者の評価―場面により母語話者の評価は異なるか―」『コミュニケーション文化』8 号 27-43
渡部倫子（2003）「日本語口頭運用能力の評価基準―評価者による相違―」『日本教科教育学会誌』第 25 巻第 4 号，11-17
渡部倫子（2005）「日本語学習者の発話に対する日本語母語話者の評価―共分散構造分析による評価基準の解明―」『日本語教育』125 号，67-75

参考サイト

国立国語研究所「I-JAS　多言語母語の日本語学習者横断コーパス　International Corpus of Japanese as a Second Language」https://chunagon.ninjal.ac.jp/ijas/search（最終閲覧日：2019 年 12 月 19 日）
国立国語研究所「I-JAS　利用マニュアル　簡易版　データの概要と検索システムの使い方 2019 年 5 月　Ver.3」https://chunagon.ninjal.ac.jp/ijas/search（最終閲覧日：2019 年 12 月 19 日）
国立国語研究所「I-JAS　FS 一覧　教室環境学習者（海外・国内）20190510 版.xlsx」http://lsaj.ninjal.ac.jp/?page_id=711（最終閲覧日：2019 年 12 月 19 日）
J-CAT 日本語テスト「J-CAT のスコアについて」http://www.j-cat.org/html/ja/pages/interpret.html（最終閲覧日：2019 年 12 月 19 日）
J-CAT 日本語テスト「J-CAT　Project」http://www.j-cat.org/html/ja/j-cat-project/（最終閲覧日：2019 年 12 月 19 日）

参考資料1　学習者の発話において逸脱と考えられる箇所（例）　※括弧内筆者補足

● 文法

・今は住んでいると、ころに住みたいですね（KKD01）

・デパートに行ったり映画館に行ったり〈中略〉田舎にはそれが、できないと思います（KKD01）

● 語彙・表現

・人もあんまりないと思いますね（KKD01）

・人ごみーに、なん、こまれる、のもー嫌で（KKD01）

● 音声

（1）アクセント

・都会は（とかい）（KKD01、KKD08）

・交通（こうつう）（KKD01）

・高い（たかい）（KKD01）

・不便（ふべん）（KKD01）

・田舎（いなか）（KKD08）

・最近（さいきん）（KKD08）

・厳しい（きびしい）（KKD08）

（2）イントネーション

・今は住んでいると、ころに（⤴）住みたいですね（KKD01）

・外に、出て、出てあるーくーのーが好きですけど（⤴）、歩いてなんか、買い物したり映画見たり（KKD01）

・仕事は、田舎、よりは都会に多い、多くて（⤴）、うーん他にはー、（KKD08）

（3）発音

・出かける（テ）（KKD08）

・美術館（ギ）（KKD08）

参考資料2　調査協力者から得られたコメント（例）　※括弧内筆者補足

● 内容

・質問の意図を読み間違えた（対 KKD01）

・インタビュアーさんの聞きたいことに対する直接的な答えでなかったり（対 KKD01）

・将来どこに住みたいかっていう話をしているのに、故郷の話をずっと、故郷はどうだったって話を最後してたってのが最後わかった（対 KKD01）

● 文法

・余計な「は（助詞）」がついたりしたのがちょっと気になった（対 KKD01）
・「に（助詞）」とか「は（助詞）」とかを付ける位置とか、〈中略〉「ので（助詞）」とか、付ける位置とか、そういった点での文法で不自然な点は特には見つからなかったように思う（対 KKD01）
・「に（助詞）」をめちゃくちゃ多用していた（対 KKD08）

● 語彙・表現

・ネイティブだったら言わないよねーみたいな言い方があった（対 KKD01）
・人が多分「少ない」ってのを言いたいときに、「人ない」みたいなこと（対 KKD01）
・使ってる単語はわかりやすい、単純なものが多い（対 KKD08）

● 音声

（1）アクセント

・「交通（こうつう）」〈中略〉単語ーのアクセントの箇所が違う（対 KKD01）
・「高いビル（たかいびる）」みたいな感じに言っていて、「高いビル（たかいびる）」ではない（対 KKD01）
・「都会（とかい）」と「田舎（いなか）」みたいに、〈中略〉会話の中で使われいてる単語のイントネーションがちょっと違うのかな（対 KKD08）
・「最近（さいきん）」とか「厳しい（きびしい）」という風に言っていて、それはそのー、非母語話者的な発音なのか、こう方言的なのに由来する発音なのかはわかんないですけど（対 KKD08）

（2）イントネーション

・語尾が弱くなる場合と、あと最後ハテナでちょっと上げてしまう場合がほとんどだった（対 KKD01）
・基本的にほとんど違和感ないなという風に思いまして（対 KKD01）
・文節の、ま、最後に来る助詞のところでそのーやっぱ上げるんですよ（対 KKD08）

(3) 発音

・「か」と「た」〈中略〉なんとなく強い（対 KKD01）

・詰まっているような感じで、で聞き取りにくかった（対 KKD01）

・「じゅ」「つ」、なんだろ濁る感じなのかな（対 KKD08）

(4) その他

・間の使い方とかなんか、そういったところがわりかし流暢っていう印象（対 KKD01）

・単語の途中で、多分迷ってるからそこの途中で伸ばす（対 KKD01）

・話そうとするのにちょっと、だいぶ間が空いていた（対 KKD08）

・声が小さくなる箇所が何か所かあって（対 KKD01）

（せきね・ちひろ　博士前期課程）